

教師にとっての ○つけ法と復唱法



愛知教育大学教授

志水 廣 氏

教育随想



平成17年2月1日

2月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

今月の紙面

教育随想	1
愛知教育大学教授 志水 廣氏	
この人に聞く	2
株式会社オリバー 相談役 大川 英子氏	
羅針盤	2
城南小学校長 石原 博文	
ふれあい	3
緑丘小 児嶋 美紀 新香山中 高田 桃子	
特集	4
世界最先端の研究施設誕生	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
岡崎養護学校との交流 (昭和57年)	
この本を	8

物事は単純に考えればよい。授業では子供が、「わかったか、わからなかったか」「できたか、できなかったか」を瞬時に評価・判断して、その「場」で指導すればよいのである。「○つけ法」は、子供がノート等に問題解決の思考過程を書いたものに対して、教師が即座に評価しレスポンスする方法である。「復唱法」は子供の発言に対して即座に評価し、教師または子供が復唱して受容し、学級のみならず広め・深める方法である。どちらも教師の瞬間「技」だと言ってよい。どちらも、カウンセリング・マインドの肯定的な気持ちで技法を使いたい。

この二つの方法は、教育理論で調べてみると奥が深い。ようやくそれ

が解明できてきた。認知心理学や脳科学と結び付くことが見えてきた。これからの教育は、「学び合いの共同体を目指すべきだ」と青山学院大学佐伯胖教授は言っている。そのため、「他者の視点を取り入れること、また共同の善を志向することだ」という。

まさに、○つけ法と復唱法は、教師が子供に対して、また子供が他の子供に対して他者の視点を取り入れることであり、善なるものの探究に他ならないのである。

二つの方法によって、子供の知の部分と心の部分の成長が顕著に見られる。これは、昨年十一月に行われた竜美丘小学校の研究発表会で実証された。また、これらの方法は教師

の意識の変容を迫る。教師の本来の役目は、一日の授業で○を持たせて帰すことである。そのためには、善なるものへの探究が不可欠である。その意味で、教師の「魂」が磨かれる技法だと考えている。

(しみず ひろし)



この人に聞く

ふるさとシリーズ



世界に通用する人に

株式会社オリバー 相談役

大川 英子 氏

「このソファ、柔らかいですよ。若い牝牛の皮が使っているんですよ。」
私たちが案内された応接室のソファは、手触りや座り心地が抜群に良い。そこに、品質の高さを誇る企業のプライドを感じた。

「株式会社オリバー」を、ご主人の博美氏と共に築き上げてきた大川英子さんに話を伺った。

英子さんは学校を卒業した後、岩津中と常磐中、美川中で合計二十年間教鞭をとられた。

「三河湖までサイクリングに行き



ました。生徒を二十人連れてね。臨海学校もありました。みそだけ持って、そこで貝を拾ってみそ汁を作りました。男の子は、女の子の気がつかないことをやってくれました。楽しかったですね。」

ご主人が会社を起こして間もないころは、英子さんの教員の給料で家計を支えられたという。

「この会社に、教え子がのべ三十人いるんですよ。先生と生徒が一つの縁で結ばれているんでしょうか。社会的に先生が信用されていたという事なのでしょうね。」

昭和六十三年に名古屋証券取引所に上場し、海外へも進出を始めた。

「イタリアの品物は、伝統的にデザインや色がいいのです。ここでは三か月間もバカンスがあり、その間子供の教育は家庭が責任を持つのです。一日中親子が行動を共にし、親

が子に伝えたいことは、この時にします。こうして技術や文化がしっかりと伝承されていくのです。」
とイタリアへの評価は高い。

教育について次のように話された。

「これからの教育は、グローバル化を考えたものであるべきです。子供たちには、世界に通用する人間になってほしいと思います。それには、まず他人に迷惑をかけることでは、

欧米の国々は、多民族国家で日本のそれとは異なります。民族が違うからこそ、お互いにわかり合う必要があるのです。人を招待すると、家庭の全部を見せるのが礼儀で、これは『家の中には敵はいません』ということを表します。あいさつの抱擁は、『自分は武器を持っていませんよ』という表現なのです。相手を氣遣う態度が大切ですね。」

英語教育は早い時期から必要であることも強調された。

「英会話ができるといいです。三歳までに舌のトレーニングを十分させると、その感覚が磨かれます。」

にこやかで、深々とお辞儀をされる人柄に、明日の世界を見据える力を感じた。

氏名 おおかわ ひでこ
生年月日 昭和六年十月三日
住所 藪田一丁目十二番地

児童生徒の理解

城南小学校長 石原 博文

A先生は、忘れ物が多い児童に自身で教科書や学習用具を整理させるため、和紙を張ったダンボール箱を持って家庭訪問をした。B先生は、宿題を忘れさせないようにするため、育児所の指導員に家庭学習の内容を連絡した。また、C先生は、決まった曜日の朝に相談室でおにぎりを食べさせていた。

全国的にネグレクト的な家庭環境にいる児童が増加しているが、本校も同様である。親に世話をしてもらえず、登校できない日がある児童がいる。このような子に、「忘れ物をしない。宿題を忘れてはいけない」と注意・指導するだけでなく、親がすべき世話まで行い、学習指導・生活指導をしている。

冒頭の対応は、相手側に立った児童理解のみならず、児童の親の理解もできているからだと思える。また、



A子の笑顔

緑丘小 児嶋 美紀

「先生、わたし最後までがんばって走ったよ。」

マラソン大会後、A子が真っ先に言った言葉だ。

マラソン大会の十日ほど前から駆け足が始まった。あまり運動が得意ではないA子は、浮かない顔をしていた。毎日のように、「赤白帽子がない」「体操服を忘れた」と言いに来るA子は、駆け足から逃げようとしているようにも見えた。また、走っても途中から歩いてしまうことがほとんどだった。

そんなある日、列から遅れて歩くうとするA子を見つけた。何とか最後まで走らせたいと思い、「あと少し、ゴールまでがんばろう」と声をかけ続けながら一緒に走った。する

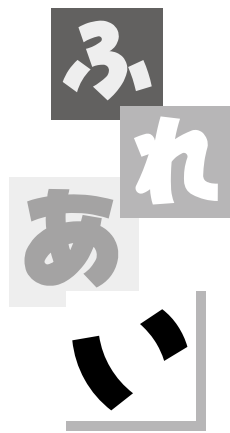


と、A子は痛そうに横腹を押さえないながらも最後まで歩かずに走り切った。その日の帰りの会でA子の話をすると、子供たちから自然に拍手が起きた。そして、

「A子ちゃん、やったじゃん。」

という声があちこちから聞こえた。A子は顔を赤くしながらもうれしそうに笑った。

大会当日、六十六人中五十六位のA子の表情は明るかった。その笑顔の奥には、クラスの仲間からももらったやる気と自信が見えた。



ありがとうのメッセージ

新香山中 高田 桃子

「先生嫌い。こつち見ないで」と言うA男。周囲の友達をわざと怒らせる。けんかも日常茶飯事。一体どういう生徒なのか、どう対応したらいいのかと、A男はずっとわたしの悩みの種だった。とにかく彼の距離を縮めるため、毎日必ず声をかけ、そばにいようと決心した。「話しかけないで」と言われても、返答がな



くても、ずっと声をかけ続けた。できるだけ長くそばにいて、A男を知ろうと努力した。

ある日、「ありがとう」をテーマに道徳の授業を行った。「ありがとう」を伝えたい人へのメッセージを書かせた。「だれもない」とA男がつぶやくのを聞いたとき、授業や生活を通してA男に何も伝えられていなかった自分の無力さを痛感した。

その夜、わたしは生徒たちのメッセージを読んでみた。次はA男。彼の書くことが予想できたわたしは一瞬躊躇し、覚悟して紙に目をやった。その時、「先生いつもいろいろありがとう」の言葉が目に入った。予想がはずれた。一気に苦勞が吹き飛び、この小さな文字がわたしを救った。「こちらこそありがとう」と、わたしは心の中でA男につぶやいた。

その理解を助けているのが、今年度から配属された、子供と親の指導員の先生や民生児童委員の方々と担任との連携である。

『親になる技術』（京都大学霊長類研究所正高信男教授著）では、「子供の間感覚は大人とは異なり、十才の子が一時間と思える時間を、三十才の大人では二十分間と感じる。即ち、『大人の年齢÷子供の年齢』と感じている。それ故、遅いと叱るのは間違いである」とか、「嘘をつく子は、自分を第三者に見立てて本当のことを言う場合もある。また、嘘をつかなければならない場合もある。要は、嘘をつかなければならない原因とか心理状態を考えなければ改善されない」と述べられている。

相手側に立つての児童や親の理解は、児童は無論のこと保護者との信頼関係を深める。それが深まれば、先生もおのずと受容的な対応による助言・注意・指導を行うようになり、相手は心を開き、こちらの意図を受け入れるようになる。また、この児童理解は、それぞれの児童の個性や学習到達度を把握した授業にも生かされる。ただ、そうする先生へ甘える親が出てきた現状を考えていかなければならない。



世界最先端の研究施設誕生

自然科学研究機構岡崎山手地区

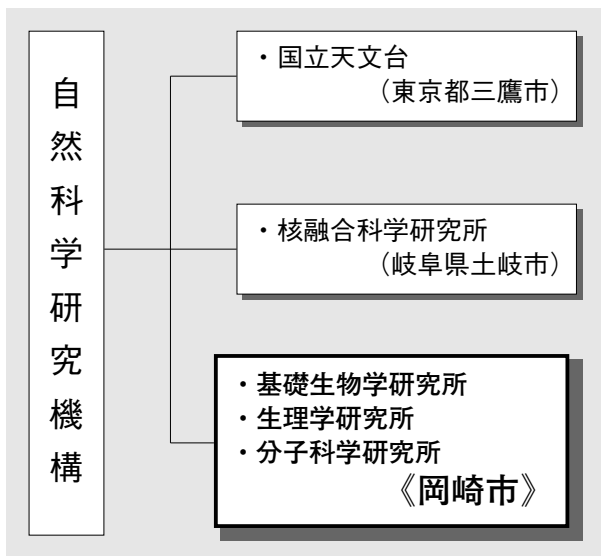
▲ 岡崎山手地区の建物の外観と一般公開に参加する中学生

平成十六年春、自然科学研究機構の新たな研究施設「岡崎山手地区」(下の図参照)が誕生した。これは以前から明大寺地区にある三つの研究所の新しい施設である。

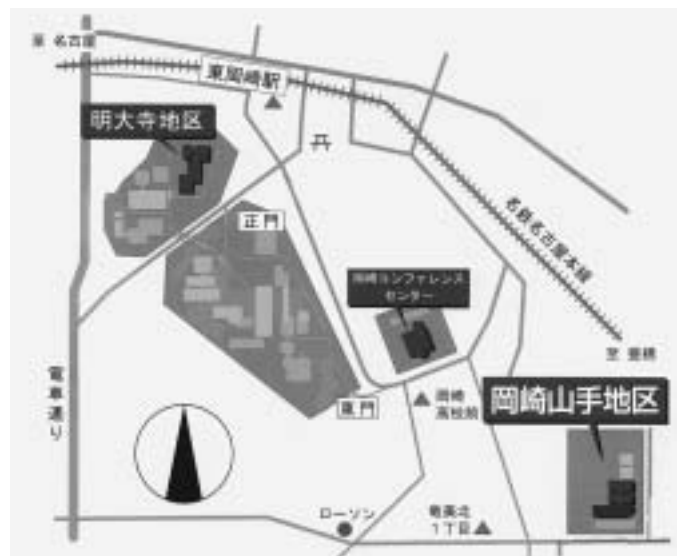
この「岡崎山手地区」では放射線を放出する化合物を用いて物質の動きを調べたり、生物の「形」を決定する遺伝子の解析をしたりするなど、最先端の研究が行われている。また、大学単位では設置困難な実験・観測装置等を利用して研究を行う「大学共同利用機関」としての役割も担っている。

昨年十月に行われた一般公開では、市内の中学生が二百人ほど参加し、施設や実験の見学を行った。隣接する三島小学校では、総合的な学習の時間の一環として、同所を訪問したり学校に来ていただいたりして、研究者と交流している。また、施設の研究者が市内の学校を訪れて「出前授業」をするなど、教育活動にも身近な施設になりつつある。

子供たちがこの世界最先端の研究施設を実際に訪れ、その研究活動に触れることにより、自然科学への興味・関心をますます高めていってくださることを期待している。



▲ 自然科学研究機構の構成



▲ 新しくできた岡崎山手地区 (右下)



▲ 厳重な管理の下で放射性同位元素を用いた実験を行っているアイソトープ実験センター (基礎生物学研究所提供)



◀ ゼブラフィッシュ



▲ ゼブラフィッシュを使った遺伝子の研究



▲ 遺伝子进行操作したマウスを効率よく適切に飼育・管理する施設 (基礎生物学研究所提供)



一般公開に参加し遺伝子について説明を受ける中学生 ▶



▲ 研究者による出前授業 (東海中)



▲ 総合的な学習の時間で外国人研究者と交流する小学生 (三島小)



● 教育最新情報

○ 小中学校初任者研修

〈研修のねらい〉

初任者研修は、その重要性から平成元年に教育公務員特例法により義務づけられた基本研修である。

教師は、新規採用の初年度から経験豊富な先輩教師と肩を並べて学級担任をしたり、教科担任をしたりする責任のある仕事である。また、子供の側からすれば、指導者が新米教師であろうとベテラン教師であろうと、かけがえのない一年に違いないのである。こうしたことから、学校現場で直面し得る課題や問題をテーマに取り上げ、実践的指導力と使命感を養うとともに幅広い知見を得させることで、一日でも早く自信を持つて教

壇に立てるようにするのがこの研修のねらいである。

〈拠点校方式の導入〉

その初任者研修が、来年度から拠点校方式の完全実施により、法定化以来、初めて大きく変わる。退職教員の増加、定数改善計画への対応、加えて、初任者の増員に伴い、従来までの研修が難しくなった。そこで、文部科学省は、予算を抑えつつ研修のレベルを保ち、教員の質を確保することを理由に、平成十五年度からこの方法を三分の一ずつ導入してきた。

これまでの校内研修は、校内の先輩教師の指導のもとで実施してきた。これに対して拠点校方式は、初任者四人に一人の割合で指導に従事する専門の指導教員を配置し、一週間に一回、終日初任者指導

を行う。さらに週二時間以上校内の先輩教師が指導するという方式である。

本市では、この拠点校方式の導入に伴い、拠点校指導教員と校内指導教員との役割分担を次のように考えて、移行期間を行ってきた。

教壇に立つ教師が必ず身につけていなければならない能力は、専門教科の指導力である。そこで、拠点校指導教員を市の教科指導員を中心に充て、将来の岡崎の教育への投資をすることにした。また、学級経営や諸帳簿の記入の仕方、生徒指導や給食・清掃指導等、一般的な教員の資質向上を図る研修は校内指導教員が担当する。

この方法は、初任者の配置とともに拠点校指導教員の人选、配置条件等とも関わり、関係学校間の連絡・調整、拠点校指導教員と校内指導教員（コーディネーター）との連携が必要不可欠となる。

本市が実施しているこの方法は、初任者に確かな力をつける方法として県内外から注目されている。

● ハートピア岡崎だより

南東側の山に砂防工事が予定されており、資材搬入道路建設のため、当所の東斜面の柿と桑の大木が最近伐採された。昨年、桑の実が黒く熟したころ、自然体験活動の一環として実の試食をさせた。子供たちは、初め恐る恐る食べていた。しかし、味を覚えると、男の子も女の子も、通所してくるなりすぐ木によじ登り、舌を紫色に染めて楽しんで食べていた。それも、今となつては懐かしく思い出される。

暖かくなつたら、二代目の桑や柿、さらにミカンやブドウなど、実のなる木をたくさん植え、前にも増して楽しみながら自然体験や人との交流がしやすい環境を整備していることを考えている。

さて、昨年十一月下旬に伊勢崎市で全国適応指導教室連絡協議会の関東甲信越大会が開催された。ここでは、自然体験活動を通して不登校児童生徒が回復していく様子が

次々と発表された。

地域の特色を生かした乗馬や登山を中心とした事例が中心であった。その中で、特に印象に残ったのは、一人の発表者がしみじみと言われた「活動は自然の中が良い。自然は人を選ばないし人を裏切ることもない」と言う言葉である。心を傷つけられた子供たちの指導には何を大切にすべきか大変勉強になった。

これまで当所が環境を最大限に生かして努力してきた自然体験活動に間違いのないことが確認できた。来年度は、夏休みの活動を今年以上にさらに充実させていこうと考えている。



▲ 海を見つめ語り合う子供たち

●表 彰

◆第二十三回「海とさかな」作品コンクール

農林水産大臣賞

連尺小 一年 鈴木 亮

全国四一九二一点の中で第一位



▲鈴木亮君親子（左）と柴田紘一市長

◆第三回全国こども映像祭

文部科学大臣賞

「南の北国? 東海学区冬の謎」

東海中学校報道部

◆ソニー子ども科学教育プログラム

入選プロジェクト校

上地 小学校

全国二二三校の中で第一位

◆名古屋市民文芸祭

奨励賞

六ツ美西部小学校

- ◆第二十二回全国小中学生作品コンクール
- 子どもの文化・教育研究所理事長賞
- 「漢字王の逆襲」
- 竜海中 三年 酒井 博越
- ◆駅伝カーニバル
- 男子
- 優勝 東海中学校 A
- 二位 北 中 学 校
- 三位 六ツ美中学校 A
- 五位 竜 南 中 学 校
- 六位 美川 中学校 A
- 女子
- 優勝 六ツ美中学校 A
- 三位 南 中 学 校
- 四位 竜 南 中 学 校
- 五位 六ツ美中学校 B
- 六位 矢作北中学校 A

詩部門小中学生の部

市長賞 井田小二年 浦田俊祐

◆社会を明るくする運動の作文コンクール

最優秀賞

東海中 一年 神谷 公実

◆第十三回少年野球中学部秋季大会

準優勝 東 海 中 学 校

◆第三十八回愛知県教育論文

●個人の部

最優秀賞

「基礎・基本を大切にして確かな書写力を育てる指導」

井田小 寄田加津子



▲船越先生（左）と寄田先生（右）

- 佳作
- 「進んで追求し学んだことを生活に生かす子どもの育成」
- 大樹寺小 酒井 智之
- 「自然や人に進んでかかわっていく感性豊かな子の育成」
- 矢作西小 畑 小普
- 「人とかがわる力を育てる交流活動」
- 梅園小 平野 泉
- 「困難に負けない気持ちを持つ生徒の育成」
- 甲山中 浅井 圭子
- 共同の部
- 優秀賞
- 「体験活動をしながら生きる力を育てる地域に根ざした総合的な学習」
- 六ツ美西部小五年部会
- (代表 船越 学)

- ◆第三十回「私のアイデア貯金箱」コンクール
- アイデア賞
- 六ツ美中部小一年 萩原 誠裕
- 東海支社長賞
- 梅園小一年 安田 実央
- 矢作北小四年 田中 美咲
- ◆平成十六年度愛知県読書感想文コンクール
- 愛知図書館協会賞
- 本宿小三年 本多奏一朗
- 優良賞
- 岡崎小一年 鳥居 聖加
- 矢作東小一年 徳原 峻人
- 六ツ美西部小一年 水野 瑛介
- 岡崎小二年 鈴木 航介
- 岩津小二年 磯谷 勇輔
- 山中小二年 浜谷 翔太
- 小豆坂小三年 種村 雪
- 小豆坂小四年 林 貴美
- 六ツ美南部小四年 北條 万裕
- 本宿小五年 坂本 隼
- 広幡小五年 滝川ゆうみ
- 根石小六年 小嶋 絢水
- 常磐小六年 辻 充洋
- 矢作中一年 模素 論
- 矢作中二年 鈴木 愛里
- 河合中三年 白井 静香
- 六ツ美中三年 鳥居 優貴

●視覚に障害のある児童生徒に対する「拡大教科書」の無償給与について

本年度四月より、視覚に障害のある児童生徒に「拡大教科書」の無償給与が実施された。該当するのは次の人である。

小中学校に在籍し、視覚障害の程度が学校基本施行令第二十二条の三に規定する「盲者」または「障害のある児童生徒の就学について」に定める「弱視者」に相当する児童生徒及びこれらに準ずる程度の視覚に障害のある児童生徒のうち、他の児童生徒に比べて通常の検定教科書の文字、図形等の視覚による認識に相当程度の時間を要する等学習に困難を来た者であつて、拡大教科書を使用することが教育上適当であると所管の教育委員会が認めた者とする。

ただし、眼鏡等で視力を矯正しうる者を除く。

該当者は、通常の教科書の代わりに「拡大教科書」が支給される。入学予定の児童生徒も含めて、該当者がいる場合、速やかに教科書担当者を通じて連絡してください。

※詳しくは市教委教科書担当へ

・カ
ツ
ト
六ツ美北中 山田泉美

岡崎養護学校との交流 (昭和57年)

写真提供：本宿小学校

フォトヒストリー 岡崎の教育

本宿小学校は昭和五十六年四月、文部省より心身障害児理解を目指した交流活動の研究指定を受けた。それ以後、四半世紀近くにわたり、県立岡崎養護学校との交流活動を継続している。写真は、昭和五十七年に開催された研究発表会での活動の様子である。

「総合的な学習の時間」の新設に伴い、障害のある児童生徒と交流する学校が増えてきた。体験を通して、共に助け合う心や相互理解の大切さを学び、障害者福祉に対する意識が高まっている。



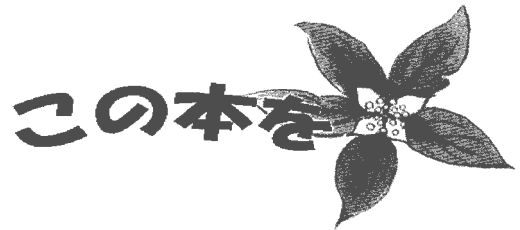
「オレオレ詐欺」の手口が巧妙かつ幅広くなり、「振り込め詐欺」と総称されるようになった。身内の安否を気遣うお年寄りや、家族の不安な気持ちにつけこんだこの犯罪は、悪質極まる。しかし、このような世の中であるからこそ、人を信じ、心を失いたくないものである。

しもやけに最後になったのはいつだったろう。最近では子供のしもやけも減っているような気がする。赤くほんぽんにはれた指先なんてなかなかお目にかかれない。家の中も学校も、そして外も暖かくなっているからだろう。それでも二月、まだ寒さは続く。

シ オ ス ア

スタッフは世界各国から集まっている。その施設とは、最先端の設備を備えた、自然科学研究機構「岡崎山手地区」である。日々進歩する科学であるが、この研究施設が、その発信源の一つになっていることは間違いない。機会があれば、施設の見学を試みてはどうだろうか。

赤鬼、青鬼を追い払い、福を呼び込むために豆をまく。家庭や学校で子供たちの歓声が響く節分はもうすぐである。受験生にとっては、今から進路を決める大切な時期である。赤鬼ならぬ睡魔を追い払い、「合格」という福を呼び込むために、ために努力をがんばってほしい。



この本を

- *日本の目覚め 岡倉 天心 ￥1300
PHP研究所
- *精神科にできること 野村総一郎 ￥700
講談社
- *灯し続けることば 大村 はま ￥1000
小学館
- *あまのじゃく人間へ 遠藤 周作 ￥1400
青春出版社

- *サービスの天才たち 野地 秩嘉 ￥680
新潮社

今や教師といえども、サービス業としての側面を自覚し、その技術を磨くことが要求されているのではないだろうか。

ここでは理髪師など6人が登場するが、いずれもサービスをそれほど客に感じさせないのである。それでいて、客をいい気分にさせている。「サービスの達人は、大きくゆっくり動いている」と著者は語る。例えば、髪にはさみを入れるとき、他の人よりわずかに大きく開くという。教師にとってのサービスとは何か、本書を通して改めて自ら問いたい。